　ネックは漂着物の入った木箱を荷車まで持って行き、慣れた手つきで珍しい漂着物とそうでないものを仕分けしていく。貝がついていたり、塩が吹いていたりするものは真水とブラシで磨いた。
 仕分けを終えると荷車を引いて、海岸を降りてノランの近くに停めた。二人で荷車に積んである樽を下ろして蓋を外していった。
 その後、ネックは肘をついて樽にもたれかかった。
　ノランは裸足になって、海辺に仁王立ちし腰布を解いて固く結び直した。
「よし！　タイミング見ててくれ！」
「ああ」
　ノランは右手に力を込め、魔力を集中させている。
　寄せては返す波が砂を削っていく。数回ほど波が往復した時、風が止んだ。
　ネックは身体を起こし、
「ノラン、今だ！」と合図した。
「よっしゃあ！　ウルトラサイコー水砕拳 ‼」
　威勢の良い掛け声と共に砂浜に力強く拳を打ち付けた。前方の砂浜がザザザッと音を立てながら隆起した。その勢いは水面にぶち当たったところで見えなくなったが、ゴボゴボと泡が沖まで突き進んでいく。
　すると、沖の一角で水柱が立った。大きな曲線を描いて浜辺を目がけて飛来してきた。
　昨日のゆっくりとした水柱と違い、水柱は勢いよく飛沫をあげながらこちらに向かってきている。
　とは言え、暗がりの中で見た水柱を比較したところで仕方がない。
「気にしすぎだよな」
 ネックはそう呟くと、すかさず両手を落ちてくる水に向けて風を起こした。水は四方向に分かれ、地面に落下せず滝のような音を立てて樽に入っていく。
 樽の中で魚や貝、海藻がごった返していた。
 二人はハイタッチをした。
「ナイスコンビネーション！」
「パワー三百点、コントロールマイナス百点、技の名前のかっこよさはマイナス千点だけどな」
「マイナス千点！？　どこが悪いんだよ！」
「水砕拳だけでいいだろ？　そもそも技の名前なんていらねえし」
「何を！　名前があるのとないのとじゃ、こう気持ちの面で違うだろ！」
「叫ぶからコントロール悪くなるんじゃねえの」
「お前に言われると説得力あるわ」
　ネックはへへっと笑い、ノランと一緒に樽の中身を仕分けし始めた。
　海藻や貝を取り除き、桶を使って魚を一つの樽にまとめていく。
「しっかしこりゃ大漁だな！」
「本当に穴場だよなあ」
　二人は感心していた。
「平和だし、人もいいし、食べるのにも困らない。本当にいいところだよ『アリーベ』は」
「だろ？　いや、魔法がなかったらここまで上手くいってないと思うけどさ」
　大きく笑った後、不意にノランが少しだけ声を潜めて、
「リアムの前じゃ言えねえけどよ、俺は魔法の使える異血に生まれて良かったって思ってるぜ」
　ネックは樽の中を泳ぐ魚を見ながら頷き、
「……そうだな」
　樽の蓋を手にとった。

　異変を感じたのはその時だった。